OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	舟は向こうの山見て漕げ
Author(s)	吉野, 勝美
Citation	大阪大学低温センターだより. 2005, 132, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

舟は向こうの山見て漕げ

吉野勝美

低温センター長に就任した時、小生の任期中にすべき最大の仕事は、大学の研究、教育の進展のため、長期的に安定して、安全に液体ヘリウムが供給できるよう、大型の液化機を導入することであることをすぐに悟った。幸いなことに関係各位の多大のご尽力、ご支援により一回目の概算要求で設置が認められ、安心して定年を迎えることが出来た。勿論、最終的に定常的に稼動に至るまでには更に多くの方の努力が必要なことは云うまでもない。

実は、この定年までの数年間やはり大阪大学の人事労務の仕事を勤めてきたが、法人化に伴って大学に所属する教職員の身分、環境が激変する中でその基本的形態、基本的あり方を決める必要があり、これまた大変に荷の重い、また忙しい任務であったが、なんとか勤め上げることが出来た。その過程で大学教職員の置かれた状況が非常によく理解できたので、下手をすると大変な事態になると云う気がしてならなかった。法人化されて一年、二年と経つに従って各人が身にしみてその大変な困難さを感じているに違いない。ともかく、途方もなく多忙になって、落ち着いて何か仕事に取り掛かると云うことが非常に難しくなってきたのである。次から次へと求められる報告、提案、評価に追われ、一方では高いレベルの研究、産業界、社会への還元、貢献など様々なことが求められる。しかも当然の大学の基本的な使命として、将来の日本、世界を支える若い学生の教育、指導をないがしろにしてはいけなく、新しい考え方をとり入れて益々充実することが求められているのである。殆どの人が目が廻るほどの忙しさに違いない。

勿論、民間企業などのおかれた立場、状況からすると、国立大学、そこで働く者にとってもこう云う状況で当たり前であると云う意見が強かったのは明らかであるが、これで本当に日本の将来のためにいいのだろうか、と云う気が、当時もしていたが、今、益々その思いを強くしている。

大学法人化が正しい選択だったかどうかは歴史の中でやがて明らかになろうが、法人化の真の目的がなんであったか、少し疑念も抱いている。しかし、大学人はその考え方、スタイルを大きく自ら変えることが避けられない状況となっている。

大学は非常に小さい組織ブロックの集まりであり、各ブロックが互いに独立である。実際には各ブロック内で教育研究の殆ど全てをこなさなければならず、しかも、その構成員数はドンドン減少している。民間企業では進展している部門では所属する人数はかなりのものになり、その中で仕事の分担、命令系統による指令が円滑に行われる形になるようにはかられている。即ち、各セクションの内容、規模と役割、他組織との境界、統廃合がフレキシブルで弾力的である。大学ではこの命令系統で動く組織の大きさが非常に小さい場合が殆どで、従って各人が全てをやらざるを得ないと

いう状況になってきているのである。しかも、各セクションの規模が縮小する上、境界が硬直化している。掛け声の上では協力体制を進める、一体化するといいながらそれは非常に難しい。しかも、各人の権利意識が極めて強く、もちろんそれが大事で、尊重すべきことも多いが、権利というよりも既得権益化しているような面が結構ある。それはいったん退職して従来と異なった社会環境におかれ、今まで以上にいろんな立場の人達との接触が多くなるにしたがって益々よく分ってくる。

このような状況を変えろ、と云う各方面からの強い外力がかかっていると考えられ、それには当然の面もある。現在の大学人に同情することしきりであるが、ともかくこうなった以上、それを梃子に、あるいは最大限生かして自ら新しく展開を図って、むしろこれをプラスに転化することが必要である。

早晩、組織、勤務形態などすべての面で民間型に変わっていかざるを得ないのは間違いない。資金的に動けなくなってしまうのであるから、仕事の境界、縄張りが弾力化するだろう。それにはある程度当然と思える面もあるが、今はどう考えてみても、形式的な面の充実を図ると云う仕事で余りにも忙しい。また、資金稼ぎですぐに役立つ、また、資金が出やすい課題の研究にたくさんの人が集中して、上滑りの近視眼的とも云える仕事が評価されると云う兆候が既に現れてきているが、これが大学の、ひいては日本の将来のためにいい姿だろうかと、特に強く疑問を感じている。長期的視点で、50年後、100年後の技術、社会、日本を支えうる基盤を育て築く多様な教育研究を絶対に軽視してはいけないと云う思いを強くしている。低温研究もまさにそうである。今回の巻頭言も、いつも述べる“舟は向こうの山見て漕げ”で閉じることにする。

舟を漕ぐとき、どうしてもやりがちであるが手元の櫓を見ながら漕いでいたのではクルクル廻るだけで少しも前に進まない。向こうの山を見て漕ぐとスーッと真っ直ぐに進むものである。

勿論、漕がないようでは論外であるが、しっかりと未来を見据えて、長期的視点を決して失ってはいけないと云うことである。